

第9次家畜及び鶏の改良増殖目標の検討状況

資料6

畜種別研究会		乳用牛	肉用牛	豚	鶏	馬	めん山羊
第1回	検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ・めぐる情勢 ・フリーディスカッション 				<ul style="list-style-type: none"> ・めぐる情勢 ・素案の検討 ・フリーディスカッション 	
	開催日	6月24日	6月19日	7月10日	7月7日	7月27日	8月5日予定
	主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・乳量を伸ばすことは重要であるが、目標値の設定方法は検討する必要。 ・繁殖性も良く、長持ちする牛づくりが重要。 ・泌乳持続性は新たな指標として有望。 	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖性向上、事故率低減、増体向上など生産性向上の方向へ大幅に変えていく必要。 ・新たな指標として、①4歳時産子数、②余剰飼料摂取量、③おいしさについての検討。 ・遺伝的多様性が失われつつあるので、その確保が必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・消費者ニーズを考慮した肉質改良基準を策定すべき。 ・肉・脂の締まりの向上は、加工側からの要望も強い。 ・繁殖性の重点的な改良が必要。 ・純粋種遺伝資源活用のための国内ネットワークが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国産鶏は系統数絞込みと育種規模の拡大により、造成を集中的に進める必要。 ・採卵鶏は卵重が63gに早く達し、持続する鶏が理想。 ・フローラーは育成率向上が必要。 ・おいしさの数値化は困難。 	<ul style="list-style-type: none"> ・種雄馬保有農家の中には自然交配にこだわり、人工授精に目を向けない傾向もあるが、広域的利用とコスト削減のため、人工授精の普及が必要。 ・乗用馬については、海外からの優良遺伝子として凍結精液の導入も必要。 	
第2回	検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ・論点整理 ・目標骨子案提出 				<ul style="list-style-type: none"> ・骨子案の取りまとめ 	
	開催日	9月予定	9月予定	9月予定	9月予定	11月予定	11月予定
	主な意見						
第3回	検討事項	<ul style="list-style-type: none"> ・骨子案のとりまとめ 					
	開催日	11月予定	11月予定	11月予定	11月予定		
	主な意見						

第9次家畜改良増殖目標 第1回畜種別研究会(豚)(主な意見)

1 肉質等について

- 消費者ニーズを考慮した肉質の改良基準を策定すべき。牛肉のオレイン酸のようものがあれば改良の方向性もおのずと決まる。
- デュロックの改良には、筋内脂肪も要素に入れてもらいたい。
- 肉・脂の締まりの向上は、加工側からの要望も強い。
- ロースの太さの目標は現状維持程度が適当ではないか。

2 繁殖性等について

- 繁殖性は遺伝率が0.1と低く改良が難しいが、ヨーロッパと比較して成績が良くないので、重点的な改良が必要。
- 乳頭数、泌乳量等母豚のほ育能力も重要。

3 改良手法等について

- 小規模な種豚場、個人ブリーダーを含めて、純粋種遺伝資源活用のための国内ネットワークが必要。
- 現在産肉能力検定の主流となっている現場直接検定では、エサの量を正確に測定できない。増体能力と飼料効率の相関は約0.7と高いことから、増体能力を飼料効率の指標として利用できるのではないか。
- 繁殖性や肉質のように複数遺伝子が支配する形質は、1つ1つの遺伝子の影響が小さく、遺伝子解析の貢献が小さい。現時点ですぐには実用化できないが、地道な遺伝子解析は将来の改良に必要。

4 その他

- 部位毎の調理法を周知すれば需給不均衡解消に役立つ。

第9次家畜改良増殖目標 第1回畜種別研究会(鶏)(主な意見)

1 国産鶏振興

- はりま・たつのは有望であり、利用拡大を進めるべき。
- 国産鶏は外国の巨大育種企業に比べ母集団が小さい。各系統の育種規模を最低でも数千羽にし、系統の数を減らし、国産鶏造成を集中的に進めていくべき。
- 例えば、白玉鶏に注入している資源を赤玉・ピンクに振り向けて、性能で劣っても価格や特色で勝る国産鶏を造成していくのも1つの考え方。
- 国産鶏の遺伝資源流出防止も課題。

2 改良指標

(1) おいしさ

- 現状では肉のおいしさの数値化は難しい。将来的には肉の堅さ、アミノ酸組成、脂肪について評価手法を確立していくことが課題。
- ある種の脂肪酸(DHA等)は卵のおいしさの指標として有望だが、現時点では科学的知見が十分ではなく、改良指標として数値で示すのは尚早。

(2) 肉質、卵質

- 消費者ニーズの高いもも肉を大きくする等実用的な鶏を作るべき。
- Mサイズ卵の上限である62~63gが最も収益性が高い。早く63g程度の卵が産め、その卵重が長く続く鶏が理想的。

(3) コスト削減

- 鶏は給餌量が個体ごとに把握できず、飼料効率での選抜が難しいため、増体がよければ飼料効率も向上していると推断すべき。
- 増体の改良を進めると、結局は腹腔内脂肪が増えて、不可食部位が増えるとの懸念もあるが、現在の主流系統を使っている限りやむを得ない副作用。
- 増体関連の成績がほぼ上限に達していると考えられるので、今後は育成率向上が課題。

4 その他

- 需要の低いむね肉等の良い調理法を普及すれば、需給不均衡解消に役立つ。
- 卵用鶏のデータ収集も将来的にはフィールド方式に移行せざるを得ず、切れ目のない比較ができるように準備すべき。

第9次家畜改良増殖目標 第1回畜種別研究会(馬)主な意見

1. 農用馬

- ばんえい競馬の先行き不透明感から、生産現場での意欲が高くない。現場の意識は、これまで同様「ばんえい競馬あつての農用馬生産」。
- ばんえい競馬対象外の馬は、馬肉仕向けになる実態があるが、馬肉生産を積極的に誘導するかどうかは生産者の心理や、競馬ファンの感情にも配慮して慎重に対応すべき。
- 種雄馬保有農家の中には自然交配にこだわり、人工授精に目を向けない傾向もあるが、広域的利用とコスト削減のため、人工授精の普及が必要。
- 競走用と産肉用の目標は似ており、馬格を大きくすることは共通の利益。
- 心肺能力など、牽引能力による選抜手法も検討を進めるべき。
- 繁殖能力は工夫すれば数値化できるのではないか。

2. 乗用馬、競走馬

- 在来馬の振興を図るべきではないか。種の保存ではなく、家畜として使っていくことが重要。
- 子供たちに馬と触れ合う機会が与えられなければ将来ジリ貧。海外では、ショーや馬車などを馬産業振興に取り入れている。
- 乗用馬については、海外からの優良遺伝子として凍結精液の導入も必要。